

編集後記

「夫木和歌抄」(1310年頃)に光俊朝臣作の‘山がらの／廻すくるみのとにかくに／もてあつかふは心なりけり’という詠がある。ヤマガラがその足と嘴で、クルミを押さえては廻し、中身の実を啄ばんでいる様子が、手際よく活写されている。今では、この芸鳥＝ヤマガラの“水汲み芸”(麻糸で吊るしたツルベを手繰り寄せる芸)や“おみくじ引きの芸”(小さなお宮の中に入ってお賽銭を上げる等の芸)は、廃れてしまった。野鳥保護の観点から止むを得ないのかもしれない。日本最古の遊園地「浅草花やしき」では、明治5年頃からヤマガラ芸が大評判となり、大正天皇もお忍びで来園、との記事を読んだ事がある。／雪町時代より連綿として続いてきた、鳥類の生態に精通している先輩からの口伝による実地の飼育方法や鳥声研究(鳴き合わせ会)のご高説を拝聴できなくなってしまった。日本にしかない、和鳥飼育文化と芸鳥の小さな文化までも途絶えさせてしまう程、我々の心に、野鳥を愛でる余裕がなく、忙しいということか。かつて、当地、弘前周辺の市町村で、5月初めに開催されていた、轉りの高さや音色の優劣を競う“マヒワ(真鶉)の鳴き合わせ会”も、今は昔だ。／この、寥々たる日本文化史の一側面での出来事は、由緒ある歴史的地名の安易な改変と、どこか一脈通ずるものがあるような気がしてならないのだが。(酒悦)
